

図書委員会の活動報告

今年度は、新型コロナウイルス感染症予防のため、例年通りの図書委員会活動が行えませんでした。不特定多数の人と対面になる図書の貸出・返却を行うカウンター当番や、グループ活動を伴う図書館文化講座など、実施が難しいと判断しました。そこで、今年度は3密・グループ活動を避けられる、本のPOP作りを行いました。

本のポップは、本のあらすじやお薦めポイントを書いて、見た人に「読んでみたい」と思わせるもので、書店で目にしたことのある人も多いのではないのでしょうか。そして、今回は作成したPOPを「ポプラ社全国学校図書館POPコンテスト」に応募し、カラーコピーしたPOPを図書室前の掲示板に掲示することにしました。対象者は、1、2年生

の図書委員及び希望者で、期限までに各自作成してもらった。32作品のPOPが集まりました。絵やデザインが得意な人、文章が得意な人、それぞれの個性が出たPOPが完成しました。

図書委員が作成したPOPは、図書室内でも今後活用する予定なので、図書委員がお薦めする本をぜひ読んでみてください。



寄贈図書の報告

公益財団法人國分奨学会より108冊の図書をご寄贈いただきました。國分奨学会は、奨学金の給付をはじめ、奈良県の教育活動や社会活動に貢献されています。

寄贈図書は、大判の図鑑や事典を中心に、皆さんの探究心を高めるような図書を選定しました。調べ学習や自分の興味のあるジャンルの本をぜひ、見つけてください。

百人一首に触れる

例年実施していた百人一首大会の代わりに、一年生が百人一首に関する課題に取り組んだ。歌の情景をイラストで匠に表現した力作から、今回は各クラス数名の作品を一月十四日〜二月五日の期間、職員室前の掲示板に展示した。興味深く立ち止まって鑑賞している生徒の姿が多く見られた。



編集後記

「ん？ あれは何？」 ビルのてっぺんから空に向かって何か突き出ている。よく見るとピアン線のようなものでしっかりと固定されている。薄っぺらな長方形の扉のような。しかもピンク色。あつ、ドラえもんのもどでもドア！

昨年の夏頃、近所の建物の屋上に突如現れたそれは、「コロナ禍で先行き見えない中、人々を少しでも元気づけたい」と某社社長が自社の屋上に作ったものらしい。漫画『ドラえもん』の「もどでもドア」は、扉を開ければいつでもどこへでも好きな所へ行けるといいう人気の道具の一つ。ステイホームのさなか、見上げると少し開いた扉の向こうに青空に浮かぶ白い雲がある。確かにその先に広がる世界を思うと心が軽くなる気がした。

あなたなら、どこへ行ってみたいと思うだろうか。コロナが収束して自由に飛び回れる世界？ 皆が集まって何も気にせず思いっきり喋ったり、食べた、触れ合うことのできる、以前は当たり前だった世界だろうか。

パンデミックから一年、私たちは未曾有の事態に戸惑い、落胆し、そしてまた知恵を絞り工夫をし、お互いを思いやることをしてきた。本当に大事なこととは何かを考える時間でもあった。生活は一変した。

会いたい人にも会えず、人との間は遠くなった。集うための学校でそれが難しくなった。しかしそんな時だからこそ気づくこともあった。人は一人では生きていけないということである。

こんな今だからこそ、心はもって繋がっていたい。そして様々な状況に置かれている人々に思いを馳せる想像力を持ちたいと思う。

読書はそんな私たちにとって心のサプリーではないか。本を開けるとそこには時や場所を超えてまだ見ぬ世界が広がっている。目の前のこと、自分のことで頭がいっぱいになるような時も、「こんな世界もある、こんな生き方もある」と教えてくれる。本を通して私たちは時に心を遊ばせ、また新しい自分に気づくこともできる。本もまた明日へつながる「もどでもドア」なのだ。

